

日本臨床睡眠医学会

Newsletter

No.11 2025



2025年7月発行

《目 次》

- 第16回日本臨床睡眠医学会学術集会のご案内
- 第11回アジア睡眠学会参加記
- ヨーロッパ睡眠学会主催のeSLEEP視聴のすすめ
- 第16回日本臨床睡眠医学会学術集会チラシ

発 行：一般社団法人日本臨床睡眠医学会
ニューズレター委員会
委員長：立花直子
委 員：足立浩祥、中島隆敏
〒162-0825
東京都新宿区神楽坂4-1-1オザワビル2F
Tel : 03-5206-7431 Fax:03-5206-7757
E-mail: ismsj@worldpl.jp

第16回日本臨床睡眠医学会(ISMSJ) 学術集会のご案内

スタンフォード大学 精神科 睡眠医学部門
第16回日本臨床睡眠医学会学術集会組織委員長 河合 真

このたび、第16回日本臨床睡眠医学会(ISMSJ) 学術集会を、2025年10月10日(金)、11日(土)に福岡市・九州大学医学部百年講堂にて開催させていただきました。睡眠愛を共有する仲間とともに臨床睡眠医学を真摯に学び合うこの学会を、福岡の地で開催できることを大変嬉しく思っております。本学術集会のテーマは、「睡眠医学の教育のために、今、必要なこと」です。

睡眠医学は、複数の診療科や職種を超えて関わるべき分野であるにもかかわらず、その教育体制はまだ発展途上です。現場では、初学者や研修者がどのように睡眠医学に触れ、学び、臨床に活かしていくか、その道筋が明確でないことも少なくありません。この学会に参加してもらうことで日常の診療、研究において睡眠医学の教育に活かせるヒントを学びとってもらえば幸いです。そのため、今回の学術集会では以下のよう工夫を凝らしました。

今回はUCLAからDr. Alon Avidanを招聘し、特別講演にて彼が実践してきた睡眠医学教育の工夫や取り組みについて語っていただきます。また、彼の専門であるパラソムニアについてもシンポジウムでご講演いただく予定です。これらを通して、「世界に通じる

日本の睡眠医学をつくるていく」という学会のミッションに少しでも貢献できればと願っております。

さらに、今年の学術集会では、極力1トラックでの進行にこだわりました。これは、自身の専門領域を越えて他分野の知見に触れ、多面的な理解を深めるという、睡眠医学が本来持つ多職種・多分野集学的な醍醐味を味わっていただくためです。そして「睡眠のチーム医療を推進する」というもう一つのミッションを、より実感いただける構成にしました。

また、ポスター発表のみの時間帯を設け、参加者同士が直接意見交換できる機会も大切にしました。学会の形に正解はありませんし、それぞれに一長一短があるとは思いますが、私はISMSJの強みを最大限に活かし、参加者のネットワークが広がり、新たな知見が得られることで、「睡眠医学のinfrastructureづくりに貢献する」という目標にも近づいていく信じています。

自由に、率直に意見を交わせる学会を目指します。ぜひ多くの皆さんにご参加いただき、ともに未来の睡眠医学の教育のために今できることを考えて欲しいと思います。福岡でお会いできることを心より楽しみしております。

第16回日本臨床睡眠医学会(ISMSJ) 学術集会概要

テーマ:睡眠医学の教育のために、今、必要なこと。

会期:2025年10月10日(金)・11日(土)

会場:九州大学医学部 百年講堂 福岡県福岡市東区馬出3丁目1番1号

特別講演: 'Sleep Education: Embracing Opportunities and Implementing Innovation.'

Alon Y. Avidan, MD, MPH

(Professor, UCLA Department of Neurology, UCLA Sleep Medicine Program Director)

参加費:

	前 期	後 期
会員(医師・歯科医師)	12,000円	14,000円
会員(その他)	9,000円	11,000円
非会員	15,000円	16,000円
初期研修医	3,000円	3,000円
学生(学部生まで)	1,000円	1,000円

プログラムの詳細は隨時、学術集会HPにてご案内いたします。

会期中は3連休にあたり、福岡市ではさまざまなイベントが開催されているため、ホテル代の高騰や予約が混み合う可能性があります。参加をご検討いただいている皆様におかれましては、早めの手配をお願いいたします。会場へ地下鉄での参加をご検討の場合は、博多駅周辺より地下鉄中洲川端、または地下鉄天神駅周辺での宿泊が乗り換え不要で便利です。

第11回アジア睡眠学会参加記

京都医療センター 精神科 杉田尚子

2025年2月、ニューデリーで開催されたアジア睡眠学会(11th Asian Sleep Research Society Congress, 8th Asian Forum on Chronobiology 2025)に参加しました。

コロナ禍以降、国際学会はご無沙汰でした。パスポートも切れ、「もう一生海外に行かないかも」ぐらいに思っていた折、アジア睡眠学会で「睡眠と精神医学」というシンポジウムで喋ってはというお話を頂きました。お声かけくださったのは、大宮の「すなおクリニック」の内田直先生で、母校の滋賀医大のご出身で、精神科医として国際的に研究も臨床も牽引する憧れの大先輩です。また、コロナ前に京大でお世話になった東京科学大学精神科の高橋英彦教授も学会に参加されること。それならばぜひインドに行きたい！と思いました。

とはいっても私は一介の市中病院精神科の一般臨床医に過ぎません。国際学会で大勢の専門家の前で話せることがあるとは思えませんでした。しかしながら、頂いた「SASと精神疾患」というお題をよく考えると、精神科臨床医こそが発言しなければならないことではないかと思いました。SASは睡眠外来では最もポピュラーな疾患の一つですが、多くの一般精神医にとっては遠い存在です。SASは精神疾患ではないからです。しかし、このSASと精神疾患は意外に深い関係にあります。これは精神科の一般臨床と睡眠診療の両方を経験したからこそ話せることかもしれないと思い、シンポジウムに参加させて頂くことにしました。



学会会場はエアロシティの中にある5つ星の高級ホテル「アンダーズ・デリー」で、重厚感と温かみのある素敵な会場でした。エアロシティは、インディラ・ガンディー国際空港に隣接した商業エリアで、ショッピングモール、ホテル、レストラン、企業のオフィス等があります。車で敷地内に入るのにもボンネットやトランクを開けて調べられ、さらにエリア内の各ホテルや店舗の建物の入り口でも空港並みの手荷物検査と身体検査があります。厳しいセキュリティーチェックのおかげか敷地内はきれいで安全でした。

今回私は学会事務局に宿泊を手配して頂けたのですが、出発一週間前のこと、私が発表する2月8日の前後2泊分のみ宿を確保したが、4泊するのならインド到着の2月6日と帰国前

日の2月9日の分の宿は自力で探すようにと、事務局から衝撃のメールがきました。もうエアロシティ内では空室がみつからず、少し離れた観光地のリゾートホテルを到着日と帰国前の2泊分なんとか確保しました。学会手配のホテルはインディア・ハビタット・センターという文化施設の中にあり、敷地内には劇場、ミュージアム、図書館などがあって無料で舞台やアートを楽しめるようになっています。インドの芸能や美術に興味はあるけれど市中の劇場に一人で行くのは不安…というようなインド初心者にはお勧めです。ホテルは2つともエアロシティの外だったので、会場までタクシーや送迎車で移動しながらカオスな市内の風景を観察できました。ニューデリーの車道はスリル満点です。車間距離なんてない、常にクラクションを鳴らし鳴らされ、割り込み割り込まれ、歩道に乗り上げて追い越し追い越され、ある時は飛び出してくる人や野良イヌを寸止めでかわし、ある時は野良ウシや野良ヤギをかわし、またある時は逆走車とすれ違い、「インディージョーンズ・魔宮の伝説」で洞窟をトロッコで爆走するシーンが浮かびました。



地図では5km程度の距離でも常に大渋滞なので1時間ぐらいかかりました。加えて、市中のタクシーも学会の送迎車も必ず約束の時間に1時間ほど遅れて来るので、もうタイムスケジュールなどどうでもよくなります。このインド悠久の時間の流れに数日浸ると、日本の分刻みの時間感覚を忘れます。帰りの飛行機は2時間遅れでしたが全く気になりませんでした。

受け付けデスクのトラブルは日常茶飯事でした。出来ないことを出来ないと言わずに試行錯誤で頑張ってくれてしまふので、結果的にミスが多く時間がかかります。空港でも学会会場でもホテルのフロントでもお店のレジでも、どこでもそうだったので、これはもうインド人の国民性の問題、デスクのトラブルもインドの旅情と思えてきました。不思議と腹が立たなかつたのは、彼らが親切で善意を感じられたからかもしれません。帰りの空港では、立花先生と一緒に搭乗手続きしましたが、どちらも「NAOKO」です。受け付けデスクのお姉さんは胸を張って姿勢を正し、「ハイ、タチバナサヘン！」、「ハイ、スギタサヘン！」と日本語で苗字を読みあげて、それぞれにしっかり搭乗券を手渡してくれましたが…渡された中身は逆でした。この国の病院では点滴のつけ間違いや患者の取り違えはないのか？少し心配になりました。

肝心の学会の報告をする字数がなくなってしまいました。総じて、扱われる領域、出身の専門領域、実臨床から基礎的な研究まで好奇心と活気に満ちた楽しい学会でした。学会の規模が大きすぎず小さすぎず、多様な知識に触れながらも、参加者同士が互いに顔を見ながら交流できる距離感が魅力だったと思います。皆さんノリが良く、私の拙い発表でもツボでは笑ってくれましたし、後から「面白かったです」とわざわざ声をかけてくれた人もいました。シンポジウムの前日、送迎車内で初対面の先生に自己紹介をした時、私が名前を言つただけで、隣にいたこれまた初対面のビンディとサリーの似合う美貌の別の先生が先に、「日本の精神科医で、明日はOSASと精神疾患の話をするのよね」と言いました。抄録を隅々まで読んで内容と無名の演者名まで全部頭に入っているとは…！嬉しかったと同時に冷や汗が出ました。

インドもASRSも初体験でしたが、研究と実臨床がバランスよく融合した場で心地よい刺激を受けました。日本でそういう場が少なくなったように感じていましたが、一人が色々なことを

するには忙しすぎるのでしょうか。研究寄りの人と臨床寄りの人が「アカデミズムがない」「臨床を知らない」と互いを批判し合うのをみてどっちもどっちだと思うこともあります。これから研究にはクリニカルクエスチョンを、診療にはリサーチクエスチョンを意識しながら、頑張ろうと思いました。



ヨーロッパ睡眠学会主催のeSLEEP視聴のすすめ

関西電力病院 睡眠関連疾患センター 立花直子

ISMSJは他の大きな学会のように専門医や専門技師(技術師)といった認定制度を取っていません。そのため学会員であることの利点があまりないと感じられる方々もおられるかもしれません。逆に言うと、認定制度で会員をしづりつけたりはせず、学術集会参加によって自由な交流ができる小回りのきくコンパクトな学会を目指しているわけですが、それに加えて、国際的な睡眠医学の動向を常に追っていくかけを盛り込むことも目標としています。

皆様もご存知の通り、睡眠医学とその臨床を支える睡眠センターというシステムは米国にその端を発していますが、保険制度の違い、キャリアの流動性の違いのために日本では根付きませんでした。さらに日本では睡眠医学を体系的に教える大学の講座もないで、睡眠医学を志した者は自学自習を強いられます。最も有効なのは、activeな海外の施設に留学することですが、それが無理な場合でも、コロナ流行前は、毎年米国睡眠医学会に参加したり、2年に1回ヨーロッパ睡眠学会に前バケや後バケをひつづけて出ていったりする機会がありました。しかし、2020年以降、日本人全体が内向き志向となり、かつインフレや円安も相まって海外に行く閾値は上がってしまったのではないか？ そういった状況の下、ISMSJは2017年よりWorld Sleep Society(WSS)のassociated member societyの一員となり、WSSからの情報を遅れることなく、会員の皆様にお届けできるよう努めてきました。ISMSJ会員にはWSSの年会費割引、機関誌であるSleep Medicineのオンライン購読など多くの特典が用意されています。

詳しくは<http://www.ismsj.org/world-sleep-society/>をご覧下さい。

さらに2025年の1年間は、ヨーロッパ睡眠学会で定期的に開催されているvirtual congress（通称eSLEEP2025）の視聴が無料で可能となりました。これは登録しておくと、リアルタイムでは視聴できなかった講義もすべてオンデマンドで視聴できるというすぐれものです。毎回、睡眠医学の中の違った分野を特集した内容になっていますので、ご自分の興味がある分野を集中して何度も視聴することができます。

まず、<https://esrs.eu/esleep-europe/> にアクセス。最初に今後、直近に開催されるセッションが出てきますので、そこをクリックして登録していって下さい。途中でWhich Supporting Organization are you a member of ? という質問が出てきますので、その質問の下のリストから Integrated Sleep Medicine Society Japanを選んでクリックすると進めます。

Japanese Society of Sleep Researchは出てきませんのでご注意。今後もこういった形で世界とのつながりを作り続けていきますので、是非ご活用下さい。





The 16th Annual Meeting of Integrated Sleep Medicine Society Japan

第16回 ISMSJ 学術集会

日本臨床睡眠医学会

睡眠医学の教育のために、今、必要なこと。

2025年10月10日(金) >>> 11日(土)

九州大学医学部 百年講堂 (福岡市)

組織委員長

河合 真

Division of Sleep Medicine,
Department of Psychiatry and Behavioral Sciences,
Stanford University

副組織委員長

津田 緩子

九州大学病院 口腔総合診療科

特別講演

Alon Y. Avidan MD, MPH

Director, UCLA Sleep Disorders Center
Professor, UCLA Department of Neurology